

[研究ノート]

ある大学院問題

藤 田 秀

〈目 次〉	§ 1	プロローグ
	§ 2	学部学生
	§ 3	大学院院生
	§ 4	就職後
	§ 5	あとがき

§1 プロローグ

私学の氷河期を迎えるにあたり、本学においても、大学院設置の可否が論じられるようになる。その時は、経営サイドからの議論が主流を占めるであろう。しかし、大学院問題には、学生サイドからの議論も有り得るのである。ここにその一例を示し、資料として提供したい。

彼はM君といった。都合6年間つきあった。大学3年生の時にクラス替えがあって、同じクラスとなった。こうしてつきあいが始まった。やがて、4年生、修士課程の大学院と進むにつれて、お互いに専攻が違って分かれた。それでもつきあっていた。しかし、博士課程に進むに及んで、いつしか疎遠となった。

彼は、ダヴィード・オイストラフの演ずるチャイコフスキーのバイオリン・コンツェルトが好きだった。筆者の家に寄ると、いつも一曲聴いて帰った。殊にその第二楽章が好きだった。第二楽章の中程の、ほんの10小節ばかりの所が、大変気に入っていた。そこでは、オーケストラが皆沈黙し、オーボエとバイオリンの2つだけが、まるで対話でもするかのように、静かに流れている。そこに来ると、M君は必ずニコリとした。今でもこの曲を聴くと、彼の様子がありありと浮かんでくる。

彼に最後に会ったのは、田無の東大原子核研究所の廊下であった。「ヤア、フジタ」と言ってニコニコとしていた。それが何年のことであったのかは、思い出せない。

M君が亡くなってから、早3年になる。ここに学生時代の彼の手紙の一部を公開し、われわれの学生時代がどんなものであったかをご披露したい。われわれは、「大学院問題」で一貫して悩んでいた。読者諸兄姉はそれを以下に見るであろう。

§2 学部学生

(1) 3年生

おはがき本当にありがとうございました。僕こそ、御無沙汰をおわびしなければなりません。実を言いますと、12日この方のびてしまいまして、四、五日前まで寝ていたんです。病気といっても別になく、要するに過労による衰弱らしいです。ここの所、すこしおとなしくしようと思っています。

震研（注：東大地震研究所）のバイト本当に大変だったと思います。どういうことがあったのか、良くわからないのですが……会ったらゆっくりお話し願えることと思っています。

僕の方は、例のごとく学友会で極く限られた範囲内で生活していて、又ここ半月寝て暮らしてしまって、その間すこし小説をよんだり、勉強したりしたので、頭の中では夏休み前より進歩したと考えてはいるものの、本当の生身の体験は全然なかったわけです。だから僕こそ君にいろいろお説教されなくちゃならないんです。夏休みの間、有志の人達十数人で新橋で署名をやりました。僕はその丁度前日に参ってしまったわけなんです。成功とは言えなかったのですが、皆はとてもよくやりました。特に霧ヶ峰へ一緒に行った人達は、署名ばかりでなく、学友会の夏休み中の仕事をまめに手伝いに来てくれました。お互いに頑張りましょう。お体大切に。

さようなら

1953年9月4日

お手紙本当にありがたく拝見しました。今日のコーヒーのおかげで、未だアタマもはっきりしていますし、今日のギロンで大分はっきりしたこともありますので、それを更にはっきりさせるために、ここに拙文を記す次第です。

僕の最近のナヤミなるものは、実にはっきりしています。それは御推察の通

り、勉強ができないということです。できないというと、二通りの意味を生じますが、この場合は無能ということです。もう一つは、客観的条件が不可能にしている方の意味になりますが、勿論これもムカンケイではありませんが、何といっても無能力ということです。

解決の道は、一生懸命勉強する以外にありません。ガムシャラに勉強する以外ないことです。それを妨げる一切のものをとりのぞくことです。

さてその第一は、頭脳のサンマンさです。僕は自分の「しごと」を完全に合理的にやってゆき、勉強も仕事の一つとしてやってゆくつもりです。僕が今日、自治会の目標を問題にしたのもそのためでした。自治会のしなければならない仕事、しなければならない勉強の時間、この二つから科学的に自治会に対して僕のできることを決定する。それを完全に行う。勉強の時間は完全に勉強に向ける。こうしていきたいと思います。自治会についてももっと科学的にやる事によっていまよりもっと直接に学生全体の役に立つものにしてゆけると考えました。

自治会の目標について、今日の帰り途によく考えました。自治会と言えば、再軍備徴兵反対、反吉田（内閣）、こういうスローガンがすぐとび出すようではいけないと思います。自治会はひたすら全学生の勉強の条件のことを考えなければなりません。下宿、アルバイト、育英資金、そして大学院、就職、授業料、実習費、そしてリクリエーション、コーラス、休学者のこと、これらが自治会の仕事なのだということに気がつきました。これをはっきりすることが大切です。（誤解なきよう——選挙権のことはもちろん自治会の重大な仕事です。）こうして自治会の仕事をはっきりさせてみると、ずい分いろいろな人にやってもらえそうだし、このために僕の時間が致命的に脅かされる事はなさそうです。

第二にファイトです。物理をやることに自信をもつこと。物理をやって食っていくことに自信をもつこと。とにかく馬車馬の如くやります。ごくつまらないこともまじめにやろうと思います。とにかく高校三年生くらいのつもりで始めます。具体的には今度のシケンに及第する位にこぎつけること。

これでどこまでつづくか、とにかくやってみるつもりです。どうか意志弱きこの僕を見守って援けていって下さい。この頃の皆さんの暖かい友情に僕がど

んなに勇気づけられているかわかりません。本当に感謝しています。きたない文、きたない字でお許してください。

1953年10月29日 午前0時20分

お手紙ありがとうございました。俺みたいつまらない奴を、こんなに心配してくれるなんて、君はなんていい友なんだろう。そして、俺は何という幸せ者なんだろう。本当に感謝します。

一. “コーヒー飲み”について。実は全く同感です。それなのに行くのは、ああいう所に行く、「本当の話」ができる面があるからです。しかし本当は、僕らの教室の中にそれを作らなければならない。つまり教室の中でそういうことが自由に話し合えなければならないと思います。政治のことも、文学、音楽、恋愛。しかしそれにしても、そういう「ダベリ」はそれだけではやはり非生産的なものです。(アアソーダ。だからコーヒー屋にゆくとダベリ易くなるんだナ)その本質は、教室の中でやっても変りない。その点では、君の第四項目「話し合いについて」になるでしょう。カラに閉じこもったままの話し合い。ナレアイの話し合い。こんなことではとても「友情と団結」はえられない。(注:「友情と団結」というのは、当時の全学自治会のスローガンであった。)友情と団結は、一緒に勉強、一緒にスポーツ、話し合い、それも本当に厳しい批判を伴う話し合いの中でかちとられてゆくのだらうと思う。そして、特に人間が苦しい立場、——経済的、肉体的、あるいは精神的、いろいろあると思う——に追い込まれた時、援け合うことが団結を作ってゆくのだと思う。「話し合い」は多くのことの糸口になると思う。大学院や就職を前にした時の、ゆるぎない団結はどうして作られていくか。時々考えてしまうことがあるのです。

二. 俺も能力ということについて、ずいぶん悩む。たしかにK君の話などきいているとやりきれなくなることもある。又、不思議なものでシケンができないなどという時、テキメンに消耗してしまう。(注:「消耗」とは「落ち込む」の意)本1ページに数時間かかる時は悲しくなり、イライラする。そういう時、俺はどうしても好きなことをしてしまう。小説をよんだり、音楽をきいたり、何

もないと新聞をよみ、雑誌をよむ。特に近頃は山の話を読んでしまう(アンダーラインは筆者)。そしてその後はますます気が滅入る。でもこれはごく少数をのぞいた誰でも、大なり小なり味わう事なのだろうと思う。だからコーヒー屋でお互いにそういう劣等生のグチ話をやったあとは少し安心する。俺は能力ということ否定しない。けれどそれが決定的だとゼツタイに思わない。物理が好きなら、どっかの研究室の片隅でメシが食えたら幸いというものだと俺はきめている。だから「好き」ということが大きな問題だ。あまり能力を問題にすると、「嫌い」になるからいけないと思う。とにかくボソボソやっていて、人が10年前に読んだ本を今読んでいたって、それが好きならいいんだと思う。それに気が付いたことだが、いわゆる既成知識は大したことはないらしいとこの頃わかって来た。だから量子論なんてシッフとハイトラーを読んだら、後は生の論文を読めばいいんだと思う。

それから僕のやっていることは、

1. 講義中はゼツタイに余所のことは考えない。全神経をコウギに傾けること。前は僕はずいぶん内職をした。一つには「どっかの本にかいてある」ということ。一つには「そんなことは知っている」という気持でノートをとらなかつたりした。これはいけないと気づいた。一旦学校で聞いたことは、もう他の本では読むまいという心組みが大切だ。又、知っている事こそよく注意してきている事だと思う。僕の例をいうと、昔はKさんの時間はノートをとりながらサッパリ理解していなかった。しかし上の様に決意した時からは、殆どわからないことはなくなった。勿論それでも時には黒板の丸写しの時がある。その時は必ず人にきくか、その日のうちにノートとにらめっこすることにしています。「わかるように話している筈だ」という確信が大事だ。

2. 一学期中、僕は教室に入ると眠くて困った。上のような心組みをしてからそれがそんなことが全くなかったのはおそろしい位だと思う。僕は大体夜12時半か1時頃になるとどうにもならなくなって眠ってしまうのが普通なので、眠くならないのが当たり前なのかも知れないが……それにしても前の日早く寝た日はとても快調で講義もよくわかる。

3. 授業外の勉強は、今全くできないでいる。シケンが終わったらハイトラ

一を一本槍でやるつもりです。シッフのことを白状すると、全くわからなかった。我ながら負け惜しみの強いにはおどろく。とにかく最後まで出ていたのだから、輪講中半分位は居眠りをしていたし、勿論全然準備をしていなかった。ハイトラーは真面目にやるつもりでいます。ワカラナクても出ている位のゾウゾウしさがが必要です。出ていると「要するに」というギロンが出来る様になる。これは「好き」になっている為に重要だ。

僕は時々ラジオの音楽などきいて勉強ができなくなってしまうことがあります。こういう時、そういう自分を不幸だとは思いません。むしろ幸せだと思います。人間としての豊かさが僕は幸福なのだと考えています。

よくわかりませんが「何のために」という質問は、少し貧血性だと思います。むしろ俺たちが「生きている」現実を僕は「愛し」ています。「愛する」材料はいくらでもあります。我々の友情。カタツムリのような知識の進歩。愛情……余りにも利己的でしょうか？

何のために勉強するのか？ 開き直られると困ります。真理が人間に幸福を与えることは確かだからではないでしょうか。時々何も俺みたいなバカがやらんともいくらでもやる人がいると思う時もありますがそれは卑怯な考えだろうと思っています。

僕は素粒子がやりたい。SさんTさんみたいな人とやれるのがいい。だから名大にいきたいと思う。だけど家のことを考えるとそう簡単に名古屋までいけるかどうかわからない。東大にいなきゃならないとしても、教養学部の方が研究室は居心地が良いと思うけど。実験でもいいと思っている。

1953年11月26日

一ぺんよんでみて散漫だなあと思いました。すいません。

返事をかかないでいたこと、あしからず。

(1)僕はずい分自制しているつもりなのに、オッチョコチョイな軽口がとび出す。不愉快極まる、クダラナイ冗説がほんとに多すぎる。君の手紙をよんでも、君に対してだけでも「しまった」と後から思ったことが数回ある。

(2) Yさんの所には行きたくないし、行けないことは明らかすぎる。この前もいったとおり、名大ゆきを考えて見たけど、やはりちょっと考えてしまう。教養学部のOさんNさんのところへ行けたら良いと思う。君と一緒にやれたらどんなにいいだろう。だけど今日のこと、ぼくはもう「見放された」かもしれないと思っている。

(3)「友情と団結というスローガンが空文にならぬ様」とはちょっと気にかかる。でも良く反省してみると、ぼくという人間はよく友情と団結を無にしていることがあるようだ。君ももうよくお察しの通り、悲しいことだが、ぼくは「利己主義」といつでも闘っていなければならない人間なので、そういうことがしばしば起こってしまう。

(4)今日のこと、少し辛かった。でも君の意見は（全くいつもそうなのだが）実にすっきりしていた。そして全く正しかった。（この点ではいつもそうだとはいえないと思う）ただ問題は、正しくない状態をどのようにして直してゆくかということだ。「見放して」はいけない。君の意見はいつもハッキリしている。そしてシバシバ正しい。しかも君はそれを公にしようとしな。つまりもう「見放して」しまうのだ。これは全くいけないことだ。

人生のなかに、何かただ一つの重大な意義を見出そうとするのはまちがいだ。ただ一つのことに意義を見出すことは、他のことに絶望しなければ出来ない。ぼくという人間は、あらゆることに絶望できない。物理にかじりついている人は、他のことに絶望したんじゃないかな。余り長くなると試験の妨げになるからこれでおしまい。（試験にも絶望しない）

1954年2月27日

(2) 4年生

僕も大学院のことを少しまじめに考えねばなるまい。僕が今、全く自信を失っているということが一つ。それにも拘らず、今の所素粒子、核乃至は宇宙線の勉強以外にスクイはないように思って、何とかしがみつこうとしている事が一つ。さてそれではどうしようというのだ。

僕はこんな勉強がしたい。科学が客観的に人類の幸福のために役立ってきたことはたしかだ。これは水爆が出来ても変わりはない。僕は人類の幸福のために、誇りと確信をもって勉強したい。ジリジリと着実に。そうしたら水爆を落とす奴に対して闘うことに、何のチューチョがあるのか。そしてこの僕が、基礎科学の基礎に向かって進んでいけたら、これ以上の喜びはないだろう。

次はNさんのことだ。彼の真剣な勉強ぶりに俺はおそれ入った。水爆の問題も、彼は自分の興味本位なんかじゃなくて、研究しているのだ。(ああ今発見した。俺の一番大嫌いな勉強の態度、即ち、興味本位！ 何と日本の科学者の多くが、興味本位で勉強して、それで得々としていることか)

そんなこと言ってもすぐに一年はたってしまう。ここが人生の苦しいところだ。苦しいから一年山で考えさせてくれといったってそうはいかないからね。しかしやっぱり待ってくれ。いいかい。(これは少し感傷かな)乗鞍の宇宙線観測所の雇員の助手位になりたい。感傷にしろ何にしろ、今のような気持ちのままだったら大学院に残るのは余りにも辛いし、いわゆる世間に出るのもとてもたまらない。

1954年5月10日 夜

おはがきありがとうございました。又、昨日はお手伝いどうもありがとうございました。5月祭の終わった夜、僕はとにかく嬉しかった。あんなに充たされた気持ちだったことは稀だった。それであそこにいた人たちも、皆そうだと思っていた。口の上でこそそのように表現されなかったけれど、皆その気持ちだったと今も思っている。例の如く、僕の甘さ、ロマンティシズム、センチメンタリズムかな？

スキーに行ければ良かったと思っています。忙しいのはどうせ忙しいのです。巧く機会を見つけてサーツと行ってしまえばよかった。今度はそうしてやりましょう。

1954年5月27日

28日は失礼しました。途中からいなくなって、ダベリも中止してしまったようです。Kさんから聞いた。昨日は都物懇ニュースを作ったあとで君を訪問しようと思っていたのですが、意外に長くかかってしまったのと、KさんとE君と長談議した挙げ句、E君に「清水の舞台から蹴おとされて」ソバとコーヒーを食べ飲みしてしまいました。話は学問の「新鮮さ」ということをめぐって、方法論や、社会的背景など近来に面白かった。

ここ数日来、回復の兆は見えていたんですが、幾日かぶりで勉強する気になって来、今日はKさんの量力（註：量子力学）の5、6章をよみました。不思議なものでBeethovenが又ノッシノッシとやって来ました。今までとかくChopin的だったのが、急に皇帝だの運命だの第九だのというのが聞きたくなってきたというわけです。大いに祝福してくれたまえ。

1954年5月30日

返事がおくれてすみません。どうしてあんなことを君が書いたのかわかりません。ずいぶんひどいと思います。たしかに僕はその前の君の真剣な手紙にも返事を書きませんでした。それはたしかに君をナイガシロにしたことかも知れません。たしかにそうかと思えます。皮肉な調子で「精神的重態」などとひやかされると全くいやになります。でもそうした気持ちの上での「困乱」というのはたしかに重荷です。友人に対してモノをかくなどということもとても苦痛になります。勉強も手に付かないおかしな状態というのは、人間である以上しかたなく通過するものでないでしょうか。そのへんで平に平に御容赦願いたいものです。

どこにも尻を持ってゆきようのないこうした気分の低下というもの、これはずっと前からちよいちよい経験したことでした。でも今度みたく巨大な波におしよせられるとさすがにゴマカシ切れなくなります。デカルトも大して読みたくないし。

クラスの人たち、僕のかげがえのない友だち、僕に同情してくれる人、場合によるとある一面について信頼してしてくれたかもしれない人たち（余り自信

はないんだが、君がそう言ってくれたのでそうかも知れないと思うようになった)の
ことを考えると、「こんなことでどうするんだ!」という気持ちが、心の底から
湧いてくる。そうだ。僕はやはりそこから、その友人たちから力を得て立直れ
るんだと思う。それにしても、僕が一番力を得ることができたのは、そしてこ
れからもそうなのは君なのだということを忘れないで下さい。君は僕に言った
ね。「君がそんなことでどうするんだ。しっかりしろよ」僕はこの言葉を忘れな
い。たしかにこれは大きな励みだった。僕に僕の友達のことを思い出させて
くれた。

君のいう通り、世に師はいないことを僕はこの低迷のなかではっきり知った。
師として読もうとする以上、書物は皆陳腐だった。全くお説教なんか沢山だ!

どうもヤケに元気のない手紙で気になります。こうなるか、全然書かないか
どちらかの道を選ばねばなりませんから、恥ずかしいことですが、本当の所
をバクロしてしまうことにします。それが一番良いことなんでしょうからね。

1954年6月3日

拝啓 ずいぶんながいこと、お手紙をかかないですみません。正直に言うと
まだ昔ほどの元気は出ません。勉強の方もとても波があります。今日はとても
気分は良いのですが、ちょっと勉強するのは面倒です。夜中の風、雨上りのす
ばらしい風でもいれて、ボンヤリ外をながめて(といっても真っ暗)いるという
状態です。他人に出した手紙の書き損じや、下書きをよんでみると我ながら偉
いことをかいているので感心する。勿論書き損じないしは封にまで入れながら
出していないの(2, 3通あります)だから良くないのもある。そのうちで一番
いけないのは一番最近の、即ち君に送り損じたのなのですが、これはくだらな
い。

人間が正直に物をいうというのはむつかしいことですね。今自分の感じている
すべてをいうことは先ずできないし、その感じ自体とてもあやふやで言っ
ているうちに(書いているうちに)その行動自体に作用されてくるのです。

大学院のことはやはり素粒子に未練をもっています。能力について自信がな

いということはあるのですが、それはあまり考えないことにします。ただ少し素粒子の人が多すぎるように思っているので、皆と競えるとは思っていないので、だめだったら核実験でもいいと思っています。核にせよ宇宙線にせよとても辛そうだと思うのですが、あのヒシメキあっているソリューシのことを考えると、精神的苦痛はどっちかなという気がします。

素粒子という目的に向かってとにかく勉強したいと思います。今の所、自発的に仲々やれないので止むをえなくやるように、輪講にでるつもりです。夏休みにE君とK君と応用数学概論IIをやらせてもらうつもりです。これは一週二回。あとフェルミあるいはハイトラーを一回つづけていきます。夏の学校ではS君と原島鮮さんの一般力学をやります。スベアがもしあったら借してくださいませんか(それより君もいかないか!)どうもあのあたりの一番かんたんでかんじんな所がわかっていないような気がします。一週間で全部やれたら人に何といわれようと良い気分だと思います。

今7月1日(昭和29年)の0時50分です。あまり遅くなりますからこの辺で。

M拝

えはがきありがとう。僕も混沌としているのでいったい何と書いて何と励ましてよいのやらわからないうちにこんなになった。一週間に二回輪講に出ているのが唯一の勉強になった見たい。でも昔ほどもうあわてていない。二回のリンコウの他何かにつけて学校にゆくので二日に一日以上学校にゆく。学校へ行って誰彼としゃべっていると元気が出る。一週間前八ヶ岳へ行ってきた。一人ではもったいなかった。至極残念だった。

1954年8月9日

返事がおくれてすみません。どうもこの頃シャベツタリ書いたりすることに全然自信がなくなっているのですこんな始末です。

「今」かんがえていることはとにかくもう少し勉強しなくちゃならないという

ことです。乗鞍行きは9月初めから半月。仕事は磁石の磁場の測定。その後はキリバコの実験の手伝いです。少し外へ出て運動しなさい。

1954年8月21日

おはがきいただきました。僕は後世に「名を残したい」なんて子供染みた考えとはとっくの昔にさよならしているのですから、君のいうことは的外れです。もちろん「どこかの大学の研究室にぬくぬくと一生送れたらいいな」とは考えます。それは人間のケチな物欲です。しかしそれとても「後世に名を残したい」などというものとは縁遠く、只なるべく楽な生活ができた方がよいといういわば本能的な考えにすぎません。「素粒子を今専攻する」ことがどの位今後の生活を苦しくするか位のことはY先生に言われなくても充分覚悟しています。出来る所まで勉強できたら後は中学校の先生をやりながらということになっても何も悔いはない……と少なくとも今は皆考えたいと思っているのです。

しかし実は僕は今本当に素粒子をやるものかどうか迷っています。自分の能力に対する不安。本当に薄給の中学校の先生になって全く悔いないかどうかということ（つまりそうなっても勉強をつづけていけるかどうかということ）などです。しかしとにかくやる以外ありません。こういう覚悟は甚だゆーうつなものです。もっと青空のような確信をもちたいものです。

1954年10月10日

おはがきありがとうございます。僕がそんなに親切だといわれると本当に困ります。むしろしばしばそうでないのですから。例えば大学院のことは結局自分中心にしか考えなかったことなど考えると冷汗が出ます。でも君が3人目の物理気象をやることになれば、たしかにすばらしいことだと思えます。分野が多少ちがっていてもお互いに励ましあって協力はできるし、又僕などはそれがなければとてもやってゆけません。勉強はどうですか。僕の方仲々うまくゆかない。今寺寛の第十章あたりを通読シタメ息をついている所です。熱力、統

計はついに物理学概説で間に合わせることになりそう。電気はKさんの本とノートを読んでいます。量子力学は何をやっていますか。僕はYさんを読みとばして間に合わせるつもり。

1954年10月28日

昨日O君と会って、29日の夜行でスキーに行くことを相談しました。場所は土樽か赤倉か未定。来年になると僕のバイトが一日おき位になってしまうこと。特に三日は絶対にダメ。もし君が行く気であるとして、29日の夜行ということで行けますか。どうしても駄目とか、OKだとか、とにかく早く連絡して下さい。

Tel 大森 8895

1954年12月25日

あけましておめでとうございます。昨年中迷惑のかけ通しでしたのに、そのどんじまりになって又々スキーなどに誘い出してひどい目にあわせてしまいました。12月31日にO君を訪ねました所、藤田君についてきてもらって本当に助かった。もしいなかったらひどい事になる所だったと大変感激していました。医者に行ったら全治2週間とのことでした。それにつけても僕は薄情な奴だと自分が恨めしくなります。僕はこれから明日の同窓会に出席するため、宇都宮へKさんとでかける所。

さようなら

1955年1月2日

おはがきありがとうございました。冬の気候は僕の健康状態にとって上々です。空気がかわいて晴れた日など全くすばらしい。ハイトラーの輪講はあまりうまくいきませんでした。できないくせにできるふりをしようとする一番わる

いくせが出てくるのでどうにもなりません。キッテルはM君と一緒にやるので何とか理想的に(?)やりたいと思っています。

お元気で

1955年1月18日

ここは船の上です。まだ発船していませんのでゆれていません。前には伊豆の山がノンビリとひろがっています。太陽は頭の上に輝いています。皆は昼食のパンや弁当をひろげています。O君はウイスキーを出しています。

僕は21日の夜10時すぎの新宿発準急で松本へ発ちます。滞在は20日ばかりと思います。O君のお話では、贈り物を下さったそうで、本当にありがとうございました。今受け取りました。「無象無象」どもが見ているので大いに困りました。さてこれから船が動きだします。

さようなら

1955年3月20日

静岡県 戸田消印

ごぶさたしました。見送っていただいて本当にありがとうございました。

観測所は仲々住心地よく、もったいない様な気がします。まだ僕がすすんで何かするという訳にはいきません。とにかく実験とは大変なものだという感じがします。問題は cosmic ray だというのに circuit のことがわからないことには手も足もでないのですから、ずいぶんばかみたいな質問ばかりしたみたいで、ようやく circuit のことがわかるようになりました。これから counter, cloud chamber と少しずつ cosmic ray らしくなっていくと思いますがそれでも要するに「実験法」をつめこむのに精一杯になってしまいそうです。

スキーはいくらでもできますが仲々うまくなりません。顔だけは真っ黒にやけてしまって皆に合わせるのが困ります。

とにかく大いに元気ですから御安心下さい。

1955年3月

長野県南あずみ郡あずみ村

鈴蘭小屋気付宇宙線観測所発

§ 3 大学院院生

(1) 修士課程1年

お見送りありがとうございました。時間にあんなに遅れた上、あんな具合に君と議論したことほんとに友達としての礼儀に失したことどうかお許し下さい。自分自身僕があまり気分的なので自分に憎悪を感じます。どうしてこんなに悪い友達なのか考えて見て結局僕の「強がり」を発見しました。強がりとは弱さの反映です。自分の弱さを率直に話し合えない以上、僕はいつまでも今までどりの下らない人間に終始してしまうだろうと思います。

こちらは今雨が降っています。三日程前雪が降ったそうで、雪の降り具合は僕が(山を)降りたときと殆ど変わっていませんが、這い松などが黒々と浮かび上がってくるなど、積もり方は大分うすくなっているようです。仕事は余り順調ではありませんが、今度は少し自分の勉強を始めています。今の予定では、11日に下山のつもりです。

敬具

1955年5月6日

長野県南安曇郡安曇村

鈴蘭小屋気付

宇宙線観測所発

おはがきありがとうございました。40日間とは長いですね。homesick にかかぬよう。まだ間はありますが、行く汽車がわかったらお知らせ下さい。一番

熱心だった君がぬけたのではさっぱり面白くないから中止します。その代わり、7月20日以前に一、二日でゆける所に行きませんか。二、三日前S君が谷川へ行かないかなんて話していました。これは9月以後が宜しい。6月の末に昔から行きたかったのは尾瀬です。一泊二日。晴れたらいつでも行きます。2日間の晴れ間を予告して下さい。今、山の手帳を読み返して、霧ヶ峰や秩父の頃は、何と楽しかったのだらうと思いました。それに比べると、それからあとの丹沢や八ヶ岳は、何だかとても淋しいものでした。

1955年6月22日

長野県北佐久郡軽井沢町沓掛
東大火山観測所宛

おはがきありがとうございます。おかげさまで元気です。この絵ハガキきれいだから、すこし君の所に送ります。気にいらなかったら、もっぱら僕の所に出して下さい。切手は大変気に入りました。あれは浅間山ですか。帰りはいつごろになりますか。上旬ですか中旬ですか。今、力学の参考書(高校)をかいています。とても面白いです。あつさにあえぎながら一生懸命やっています。ではお元気で。

さようなら

1955年7月9日

お手紙とおはがきありがとうございます。速達にはいくらかめんくらって、開封してみても大いに面食らってしまった。1, 2, 3, が $N = (N - P)(N - Q)$ で $P = N - 1$, $Q = 0$ 以外にはどうしようもない数だという証明はわかった。極めて明快で面白い。そしてそういう数はたしかに素数にちがいない。本文の方はどうもよくわかりませんでした。ついでにどこがまちがいのかも。

最近自分のしていることに嫌気がさして困ります。いつまでもこうフラフラと方針もなく、あてもなく、やれ核だやれ場だやれ何だと目先を追って、(それがそれなりに理解できるならとにかく) それもどうもその場かぎりではわから

ない。こういうことはもうやめたくなくなっています。自然科学は自然の認識であるという自明の事柄を忘れていたような気がします。(物理とはアソビではなかった)そういう科学に対する無方針ぶりは、僕の世界観における無方針ぶり、すなわち思想の貧しさ頑^{カク}なさと同じのものであったようです。自分の思想的建設こそ、先ずなしとげなければならないと思っています。

それにしても、古典物理学及び量子力学が、非常に(絶対にデハナイ)確実な、精密な、自然の法則性の反映であることは、実践によって検証された。こうした事どもをガッチリと身につけることは、いかなる分野にたずさわる自然科学者にとっても、義務であると思います。僕は一方ではそうした技術を軽視し、それをケンキョに学ぶことを怠ったことをひどく反省しています。これから大いに勉強するつもりです。一緒に勉強して下さいよう、おねがいます。

1955年10月4日

二三日良い天気です、ガラス戸の中は眠くなるようなもの静かな日射しです。外は冷たい風らしく、戸がガタガタ音を立てています。

毎日忙しいようなヒマなような、本ばかり読む生活がつづいて半年、「こんな事していていいのか」という気になってきています。もし物理がこのままアカデミズムの枠内に止まっている他ないなら、僕のこれからの生活は、どういってみても説明がつかないという気がします。ひょっとすると、いやたしかに、「アカデミックな物理学」は一握りの英才に任せておけばいいのじゃないかと思えます。もし物理を(他の学問が、次々とそうなっていったように)アカデミックな枠から解放できたら、僕の一生を捧げても悔いしないでしょう。

1955年10月8日

栃木県日光町丸山

東電日光寮宛

お元気でお仕事を続けていることと推察致します。道具がうまくいかないで、

ずいぶん参ったとは思いますが、あんまり力を落とさないで、元気にやってください。

こちらはあのオブローモフの負い目(注：ツルゲーネフの作品中に出てくる西欧主義者)から段々抜け出しつつあります。というのも全く君のおかげと感謝しています。

宇宙線の空気シャワーという超高エネルギー ($10^{12}\sim 10^{18}\text{eV}$) 現象があるのですが、これは実験的にも理論的にも大変面白い上に、Physical Review にはこの関係の理論が全くとりあげられていず、又(従って?) 東大あたりでは全く人気がないというのが、大いに気に入っています。そのうちに大流行になるかも知れませんが、そうなったら嫌だな。そうならぬうちに何とかして……というわけで着々と勉強を始めるつもりです。

雪はずいぶん降ってますか。スキーをやれますか。もしうまくいったら、僕に挑戦してごらん下さい。ホームシックにかからないように。出発のとき、見送らないでわかったな。

さようなら

1956年1月19日

来てから一度もはがきも出さないで、申しわけありません。とにかくなれない上に、連日午前午後ぶっ通しで何かかにかあるので、もうフラフラになってしまいました。それで、というわけではないのですが、あとはもう具体的な実験計画が残されているだけで、僕には関係がないので、これで帰ることにしました。ここから、京都—東京—土樽—東京という回遊券を買おうと、土樽往復約100円位にしかつかないので、そのように買おうと思います。通用期間は7日間ですから28日迄有効なのですがいかがですか。それまでに一緒に行けませんか。

一作^(ママ)、日曜日には、広隆寺のミロクボサツ、竜安寺の石庭、金色に輝く新金閣寺 etc を見て来ました。京都の名ソバ、名ウナギの類も、いろいろと食べさせてもらいました。その話は又、22日早朝にヨコハマに帰ります。

さようなら

1956年2月21日

京都にて

(2) 修士課程2年

おはがきありがとう。でもあの日は、水にしぶる桜の花を見ることができたので、満足しています。

学校を出る出ないということについては、こう考えました。学校には、自分および家族が許すだけ長くしようと。なぜなら、まだまだしたいことは、山程ある。それをするには、暇があるのにこしたことはない。閑人というようなコンプレックスは、全くばかっている。要するに、したいことはいっぱいあるのだから。

1956年4月11日

おいしいお土産をいただいているながら、お礼状がおくれてしまい、まことに申しわけございません。家中でおいしく頂きました。吉田耕作著「物理数学概論」ですが僕も持っているので、借りたはずありませんし、実際ないようです。まずはお知らせまで。

1956年5月14日

お元気ですか。僕は元気です。昨日、一昨日は打ち上げ花火大会でとても賑やかでした。

長野県大町市

木崎湖畔夏期大学

1956年8月16日

(3) 博士課程

山の上は猛吹雪でした。樹氷もみごとに成長していました。下の方は、小枝の一本一本に美しい氷の花が満開。上に登るにつれて、段々荒削りの彫刻から、巨大な氷柱へと発展してゆくのがわかります。

君が来られなかったのは、ほんとうに残念でした。二重の意味で。というのは、僕はもう当分スキーは止めにするつもりだから。

さようなら

1957年4月7日

すっかり返事がおそくなりました。俳優座の券を二枚ありがとうございました。母と一緒に観にゆくことにしました。心からお礼を申し上げます。「心から」にしては、ずいぶんおそくなってしまったのですが、あまり学校に行けなかった上、たまに行ったときは、君に会えなかったので、直接会ってお礼をいうつもりだったのが、だめだったのです。申しわけなさいでいっぱいです。

1957年7月2日

お手紙ありがとうございます。それよりも先に4日の夜のことを弁解させて下さい。8時40分頃体育館について、それから君の家へ寄った。リングはおいしくいただきました。飴も大変おいしかった。お母さまに宜しく申し上げて下さい。来年5月にはコマバに帰るでしょう。

1958年11月7日

§ 4 就職後

昨日、伊勢丹から、皆さんからの贈り物がとどきました。とても立派ですし、

説明書をよんで一層気に入ってしまいました。本当にありがとうございます。こちらへ来ていただければ、冷やしたビールを御馳走できます！こちらに近く来たときにはぜひ寄って下さい。所は少女歌劇で有名な宝塚、植物園、動物園、すこぶるきれいな河原が、すぐちかくにあります。河原の砂が白いので、ちょっとオトギ話めいた美しさです。六甲の山に近いのでたのしみです。

未ピツながらお母さんによろしく。

1960年4月24日

§5 あとがき

以上で、M君と交わした「大学院問題」に関する文通の、御紹介を終わりたい。35年前の、20代半ばの我々の議論には、いろいろとあらが見える。読者諸兄姉も御同感であろう。それは「時代の差」というものである。今日では、皆な、35年前より賢くなったのである。また、大学院の制度もととのって来た。時代は進歩したのである。昔の「問題」のいくつかは、今日では問題ではなくなった。喜ばしいことである。

真剣なM君の手紙を読んでいると、まるですだれ越しにものを見るように、筆者自身の姿も浮かび上がって来る。思うに筆者は、答えようのない問題をひっさげて、M君にその回答を迫ったのである。気の毒なことをしたと思う。

当時、我々の前面に立ちだかった問題は、正面からは、回答不能の難問と見えた。しかるに今日、振り返るようにして裏側から眺めると、ちゃちな舞台裏が見えてくる。かくて、筆者の心は今や平静だ。願わくばM君、君も平静に眠ってくれ給え。

おわりに、「きけわだつみのこえ」から、詩一篇を取って、貴君におくる鎮魂^{レクイエム}歌としたい：

雪の夜

人はのぞみを喪っても生きつづけてゆくのだ

見えない地図のどこかに
あるいはまた遠い年月のかなたに
ほの紅いつぼみを夢想して
凍てつく風の中に手をさしのべている
手は泥にまみれ
頭脳はただ忘却の日をつづけてゆくとも
身内を流れるほのかな血のぬくみをたのみ
冬の草のように生きているのだ

遠い残雪のような希みよ光ってあれ
たとえそれが何の光であろうとも
虚無の人をみちびく力とはなるであろう
同じ地点に異なる星を仰ぐ者の
寂寥とそして精神の自由のみ
俺が人間であったことを思い出させてくれるのだ

日本戦没学生の手記

「きけわだつみのこえ」より

田辺利宏

日本大学卒業

昭和14年12月入営

16年8月華中にて戦死

26歳

(1990年7月7日 深夜に記す)